



発行所
日本聖公会 東北教区
仙台市青葉区国分町2-13-15
TEL 022-223-2349
FAX 022-223-2387
<http://nssk-tohoku.com/>

シリーズ「東北の信徒への手紙」

ミッション 私たちの使命

司祭 ヤコブ 林 国秀

昨年11月に行なわれました東北教区教区会で「東北教区5年・10年展望会議」によって作成された「ミッションステートメント(宣教方針)」(案)が常置委員会から提示、報告されました。この宣教方針案について、私の遣わされている盛岡聖公会において、今年の大斎節に毎主日礼拝後、昨年の教区会に盛岡から参加した4名の方々が順番に説明して、教会の皆さんと分かち合い、毎年行っている「大斎節勉強会」として学びの一時を得ることができました。折しも盛岡聖公会では、牧師館改築・仁王幼稚園園舎改築という一大事業を控え(7月1日から工事は開始いたしました)、教会・幼稚園のミッションを見つめ直す大変良い機会となりました。

作家の五木寛之さんという方がいらっしゃいますが、誰もが知る日本を代表する作家

のお一人で、私の出生地(福岡県香春町)を舞台にした小説「青春の門」でも有名です。また、人の生き方について、たいへん深い考察をされた本をたくさん出版しておられます。近年は、主に仏教の立場をベースにしながら語る



れ、また、日本の寺院を巡る旅などの番組もBSで放映されていますが、私たちにとても学ぶべきところが多いように思います。数年ほど前であつたと思いますが、理容室の待ち時間に何気なく読んだ週刊誌に、この五木寛之さん

「サラリーマンよ。ミッションを持って」というような内容のことを書いておられたのを読みました。その記事では、「仏教でもキリスト教でもないから、きちんとした宗教について学び、よく考えなさい」と勧め、「ミッション」すなわち何のために自分がこの世に生を受けたのか、何のために生き、何のためにこの仕事をしているのかについての使命感、世界観をしっかりと持っていると書いていました。そして、ミッションが明確になることにより人に命が吹き込まれ、生きる者となるというキリスト教の聖霊降臨の出来事と重なるようなことが語られていたことに興味を持ちました。

今、教会のミッションとは何か、また、教会の関連附属施設としてある幼稚園や学校のミッションとは何か、そして、私たち一人一人、さらに私たちの家庭のミッションとは何かということを見つめ直すことが求められています。それは、一人一人に信教の自由という権利が与えられている中で、単純にキリスト教を信じることを人に求める

ということではないと思います。さらに自分たちだけが唯一の真理を手に入れていたと自惚れ、良し悪しは別として自分たちとは違う形と方法で真理に触れている多くの宗教・宗派があることも認めなくてはなりません。そして教会が教会の信仰に触れる人たちに、自分らしいミッションや自分の居場所を発見の手助けをするような、そういう場所であつたら良いなと思います。簡単に申し上げれば「生きていてよかった」という喜びを感じられるようにするのが教会なのではないだろうかと思うのです。今社会を見渡せば、貧困格差の問題、ジェンダー、LGBT、少子高齢化の課題や家にこもってしまった方々に対する課題、それらの問題が原因の一つといわれる親の自殺や児童への無差別殺人など、多くの問題が渦巻いています。そのような社会の中にある教会の存在意義はより増していると思えます。主の御導きを祈りつつ歩みたいと思います。

(盛岡聖公会牧師)



6月15日(土)午後1時より東北教区主教座聖堂 仙台基督教会で行われた聖職按手式で、パウロ渡部拓執事が司祭に按手・聖別されました。東北教区にとって実に14年ぶりの司祭按手式であり、吉田雅人教区主教にとっては、教区主教就任後初の聖職按手式となりました。

礼拝堂を埋め尽くした会衆と共に、この日を迎えることができたことは、東北教区にとって、大きな喜びと感謝となりました。



2011年4月。あとわずかで京都に旅立つという時に発生したのが、3月11日の東日本大震災でした。入学前で忙しい中、各地から寄せられた支援物資を懸命に仕分けしていた姿を思い出します。

「こんな時にこの地を離れるべきではないのではないか。」と葛藤していた姿がありました。しかし加藤主教はじめ多くの人たちから「今行くべき道を進め」と励まされ、旅立っていきましました。これからも様々な試練を乗り越えて、召しに答えていくことでしょう。主に感謝。

(編集部)

「司祭に 按手されて」

司祭 パウロ 渡部 拓



2019年6月15日に多くの

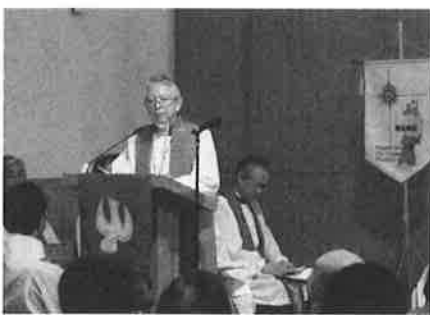
の人々に見守られながら、公会の司祭へと按手されました。これも聖霊の導きと皆さんの祈りと支えのおかげであると感謝しています。わたしのよくな人間が、ここまで来ることが出来たのも、神様と周りの人々の支えがあつてこそであると強く感じています。

このように按手を受けたわたしであります。当日にもお話しした通り、ここまでの信仰生活と人生は躓きの連続でありました。思春期特有の教会への反発もありましたし、学生時代には、外の誘惑に負けて教会を無視する日々を、社会人になってからは忙しさを言い訳に遠ざかり、敬虔と

はほど遠い信仰生活を送ってきました。

そのようなわたしが様々な経験や出会いによってこの道を選んだ、いやこの道に導かれていった訳ですが、その道中においても迷いと躓きは続きました。それは加藤主教のメッセージでもありました。東日本大震災の体験も、もちろんわたしを迷わせましたし、現場に出てからも様々なことで思い悩みました。

正直なことを言いますと、この按手に臨む期間にあつても、本当にギリギリまで思い悩んでいたのです。「本当にわたしにこの職が務まるのか」「わたしの召命は本物なのだろうか」様々な不安や迷いが頭の中を渦巻いていました。



説教者 加藤博道主教

そのような中で迎えた直前の秋田でのリトリートにおいて、影山司祭から出エジプト記の3章から4章にかけての「モーセの召命」の場面が黙想として与えられました。そこでモーセは「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」と言い、「彼らは私のことを信用しないし、言うことも聞かない」あるいは「自分は弁が立つ方ではないし、口も舌も重い者です」と言い訳を並べて神様の召しに反発します。しかし最終的にはモーセは神様から怒りを受けながらも、アロンという同労者が与えられること、何よりも神御自身が常に「共にいること」を約束されて、任務について行った。そのことを良く想い起こしなさいと指導を受けました。

この指導を受けて、ようやくわたしは「自分に務まるか」「大丈夫だろうか」と悩むことそのものが、自分の力に頼る傲慢であり誘惑であったことに気がつきました。そして



司祭按手の証朗読 影山博美司祭

「使徒聖パウロの労苦と現在の私たち」

福島聖ステパノ教会

パウロ 浅原 和裕

6月15日に司祭に按手されたパウロ渡部拓司祭に心から祝意を捧げます。

思い出しました、これまでも躓く度に誰かに励まされ、神様の言葉に力づけられ、何とか歩いてきたではないかと。この気付きによって、今わたしは希望と喜びに溢れています。確かにわたしは足りな

いものであり続けるけれども、神様とそして同労者たち、教会の仲間が「共に」あれば、進んで行くことが出来るのだと確信しています。神様と、そして皆さんに招かれて按手を受けた者として、この東北教区の信徒・教会のため、宣教のため、神の国の実現のために力を尽くして参りたいと思います。そして皆さんと、多くの喜びを共に出来ま

すことを祈り求めて参りたいと思います。来、様々な試練、投獄、鞭打ち、投石、難船、盗賊、寒さと睡眠不足と飢餓、代官からの逃亡、日々迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事に対峙し、試練に当たれば心を熱く燃やしました。そして多くの弟子や信徒に支えられそのミッションを全うしたことは数多の書簡によって示されています。苦難が神に祝福されたものであったのです。さて、まさに今はネット世界が溢れ捲り、自分善がりの好き勝手、如何にも自分に災難が降り掛かっているかのよう

な被害者意識満載、考えられないような戯言を発信、全て他人の責任、自分は悪くない。拳句の果てに社会背景も考えず自己責任だと責任転嫁他人と関わらず発信することが即ちストレス発散。考え抜かず

に鵜呑みにしてしまいう人々。そして素晴らしい説教も右耳から左耳へ抜けてしまう私気づかない、自分のことではないからと考えず勘違いしています。勘違いを続け自信満々の独り善がりの人間を形成しつつあるような気がします。だから今のままでいいのだと。渡部司祭はある時の説教で「どうせ仕方ないからいいのだ」ではなく「その為に寄添い祈るのだ」と話されました。いつの時代も教会は信徒たちによって神に仕えることと、隣人を愛することでも存立していますし、また続けるはず

です。私たちに今、提案されている「ミッション・ステートメント」案を、気持ちの一つにして真に学習し掲げ実践することが求められていると思います。謙虚に「献げ出し、開くこと」が、信徒力の発揮となり閉塞感を打ち破る決め手になるのではないのでしょうか。6月16日は渡部司祭にとって福島聖ステパノ教会で初



ての聖餐式、白のチャズブル姿もなかなか決まっていますよ！

常置委員会報告

【第9回6月7日】▼宣教会

議報告・次年度教区予算作成

スケジュールについて報告。

今年度教区行事日程報告。「教

区事務所だより」の紙面刷新。

教区新組織と新業務分掌の活

性化に向けて、宣教会議長か

らのヴィジョン共有の重要性

の指摘を受け意見交換。▼会

計状況報告・主な会計処理事

項を報告。▼主教報告・動静

報告。教区内諸対応事項報告。

▼常置委員長報告・昨年度統

計表の集計が纏まり東北教区

の現在堅信受領者数は695

人となり一昨年から22人減

り、700人を割った旨報告。

▼主教諮問事項・渡部拓執事

の司祭按手後の人事を承認。

▼管区行事等参加者への費用

補助支出について・青少年へ

の補助原則を成人にも適用す

る旨などの修正を加え承認。

▼ヴァイアル山荘現地測量・

境界測量の実施について・今

後の活用のため現状の土地状

況を把握し、解体・再建築に

向け実施することを確認。費

用は教区「施設管理費」から

の拠出を承認。

訃報

司祭 テモテ 中山眞師

(米国聖公会・退職)は、去

る6月8日、米国のシア

トルにて逝去されました

(87歳)。同師は1998

年から2000年の約2

年間、青森聖アンデレ教

会、松丘聖ミカエル教会

嘱託牧師としてお働きく

ださいました。同師の魂

の平安をお祈りいたしま

す。

「原発のない世界を求める国際協議会」に参加して

仙台聖フランシス教会 ヘレナ 佐藤 由美子



「ぼくは原発事故の次の日に福島を離れてから、一度も自分の家を見ていません。2年生の3月に急にぼくは東京の子になりました。……楽しかったことがみんな消えて……」相

の年に大人だった私たち、私はどう謝ればいいのか、どうしたらいいのか。今回の国際協議会に参加して最も忘れ難く、あの出来事を決して忘れない、できることを見つけてやっていくのだ、と決意させてくれたのはこの少年の言葉。



去る5月28日から31日、仙台で「原発のない世界を求める国際協議会」が開催されました。参加者はドイツ、台湾、韓国、フィリピン、英国、米国からと日本からは11教区の聖職・信徒。総勢68名。28日午後「『原発はやめよう』の最初の声」が次第に忘れられ記憶が失われている今、もう一度思い出し考えよう」との開会の祈りの後、基調講演が一般公

澤牧人司祭

が紹介した11歳の少年の作文のこのフレーズが忘れられない。「お父さんは一人で福島の家に残ってがんばったけど、心と体がこわれて……」こんな目に合わせてしまった。そ

開で行われました。仙台基督教会の礼拝堂が人で埋まりました。そのあと茂庭荘に移り、祈りと学び、話し合い、中身の濃い時間を与えられました。そして最終日には「原発のない世界を求める国際協議会声

明文」が熱心な話し合いの末に採択されました。

基調講演者はミランダ・シュラーズ氏。環境政策などの研究者で、東京電力福島第一原発事故直後設置されたドイツ政府「原発問題倫理委員会」委員として政府がエネルギー政策を大転換する道筋を作ったお一人でした。日本語でわかりやすくその話をしてくださいました。

ドイツは難しいことが起こると委員会を立ち上げるそうです。メルケル首相が原発稼働延長は間違いかもと考え立ち上げた諮問委員会に「倫理委員会」と命名したのは、これが次世代に問題を残すという倫理面の問題を内包しているから。キリスト教聖職者が消費者問題研究者らとともに

委員を務め原子力関係者は入っていない、という話には政治のなんという彼我の差異かと驚きました。ドイツが選んだのは「原発は事故が起こればどんなエネルギーよりも危険、10年以内に自然エネルギーを増やし脱原発することでした。それが現に進められているということだ。

日本でもやればできる、というのではないのでしょうか。

毎日朝夕の祈り、発題があり、シェアリングが行われました。惨禍の中でどう祈るか神学的に問いつつ支援を続ける「東北ヘルプ」、原発を廃炉にしていく台湾、脱原発を求める運動がある韓国などの発題がありました。ミランダ氏が語ったこと「事故が起こったとき政治は姿勢を決めなければならぬ。危機があつて窓が開く」を各国が真剣に行っていることを知りました。

フィリピンのパチャオ主教は放射能からの避難の想像を絶する苦しみを思いヤコブ書を引いて、聖書は苦難の中にあつても「主への信頼に立つよう勧めている」「祈りは強い」と話しました。どんな場合でも祈ることがキリスト者のしるし、しかし単に膝をついてではなく再発しないように「手」でも祈っていきましよう。温かい連帯の言葉でした。延べ14グループでのシェアリングも熱のこもったものでした。私は内心ドキドキで参加したのです。でもシェアリングの場には私の小さな意見

できえ引き出してくれる雰囲気があり、証言ドキュメンタリー「福島は語る」を観た感想や女川原発再稼働の是非を問う県民投票条例制定を目指した署名活動をしたこと、再生可能エネルギーの多い小さな電気会社を使っていることなどを話していただきました。

各グループで「大きな力はフクシマの記憶を消そう」として、私たちはなおさら覚えていなければならない」「未来を受け継ぐ次世代に原発による負債をこれ以上残さない」ことなどが共有され声明文に反映されました。

初日5月28日は東日本大震災から3000日となった日でした。地震・津波、原発事故で大切な人を失い生活の場を壊された方々は3月11日だけでなく月命日、様々な節目にも皆で祈り続けています。「死ぬまで私の復興はありません」という方がいます。またあの少年の言葉。その重さを思い、祈る、手でも祈る(具体的に学び考え行動する)ようでありたいと、参加させていただいたことを感謝しつつ決意しています。



「感謝」

秋田聖救主教会

マリア 児玉 育枝



私は、親族全員が聖公会の信者である家に生まれ、生

後2カ月で幼児洗礼を受けました。もちろん記憶はありませんが、ただ、家の棚の上には、十字架と亡くなった祖父の写真が置いてあり、物心ついた頃、母がいつも「神様に感謝」と言って祈っていたのを覚えていません。ですから、私も自然に「感謝」という言葉をおぼえていました。

幼い頃の私は両親に連れられ教会に通っていました。が、学生時代、さらに社会人になってからは、部活、友人との予定等が優先され、教会とは少し距離ができていきました。

その後、私は母の突然の死、

父の看病、そしてその死を短い間に経験しました。そのため、ますます教会に行くことが少なくなり、さらに、「神様に感謝」することを忘れてしまっていました。ただ、父の葬儀が終わり、落ち着いた頃、私はたくさん感謝を忘れていくことに気がつきました。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」(テサロニケの信徒への手紙一第5章16から18節) この聖句を、その頃に目にしました。

たくさん苦しいことがあった時、私は神様に救われ、教会に助けられたこと、信者の方々に励まされ乗り越えられたことを感謝しなければいけないと思えました。何かを与えられた喜びや、完成した感謝だけではなく、今、信者であるその状況を喜びとして感謝したいと思えました。それには祈ることが大切だと聖句は教えているのだと思えました。

その後、教会に行く回数が増えて行き、婦人会活動にも加えてもらったり、子どもたちを日曜学校に参加させてもらったりしました。

10年前、聖使幼稚園の事務の仕事のお誘いを受け、理事長や園長もよく知った信者の方だったので、お引き受けしました。そこでは、若い教諭が毎朝司祭様と聖書を読み、園児たちとお祈りをし、時には司祭様に代わって園児たちに聖書のお話をしていました。

たまたま採用された幼稚園が聖公会の幼稚園だったという彼女たちに、毎日のお祈りについてどう思うか聞いたことがあります。すると、「お祈りは自然にすつと入ってきます。神様への感謝を大切にすること、神様が守るように子どもを守りたいと思います。この幼稚園、教会に来てから良い人たちしか出会ってないですから。」と、話してくれました。私は、信者であることの喜びを感じました。入信して60年、昨年還暦を迎えました。これからも信者であることの喜び、お祈り、感謝の気持ちを忘れず生活をしていきたいと思っています。

礼拝堂探検隊

礼拝堂にあるいろいろなもの、その意味を調べてみました。

(第3回 洗礼盤-②)

前回の宿題「洗礼盤は真上から見ると何角形?」。答は「八角形」でした。

なぜ八角形なのでしょう。それは神の創造の七日目を越える第八の日、即ち復活、新しい創造を象徴するからです。



京都の聖アグネス教会を上から見ますと、聖堂の南

西部に八角形の洗礼盤があり、その中に洗礼盤が置かれています。このような形は五世紀頃に現れたようですが、他にも長方形や十字架形、六角形のものもありました。

右下の写真の洗礼盤は仙台基督教会のもので、形は円形で、置かれている場所も礼拝堂入口ではなく、会衆席と聖所との間です。円形の洗礼



(洗礼盤・仙台基督教会)

盤は十四世紀頃から始まり、新生への母胎、永遠の命を象徴するそうです。また会衆席の前に置かれているのは、洗礼盤が祭壇、説教台、聖書朗読台と共に、教会の中心的な「救いのしるし」と位置づけられているからです。

このように洗礼盤の形は多様です。左は英国ソールズベリー大聖堂の巨大な洗礼盤で、多分の生命の泉を象徴しているのです。(教区主教)



第4回「被災地巡りツアー」に参加して

仙台聖フランシス教会
パウロ 齋藤 眞三



の夏、家族と訪れた時の綺麗な印象が強かったのでも訪れたかったのです。

素晴らしい橋が完成してあつという間に大島に着き、昔船で渡ったことが嘘の様でした。テレビで見た時より町は良くなっていましたし、何よりも車であつという間に行き来できる様になったことは、素晴らしいと思えました。しかし運転をしてくださった渡部氏が、盛んに道が分からないと言っておられたので、ナビにも地図がなく、道路の整備が完全でないと思えました。苦労して到着した大島小田の浜で、皆で東日本大震災を覚えてお祈りをしました。ちょうど雨脚が強くなり悲しみが増した様に思いました。お昼間は気仙沼海の市で美味しい海鮮丼を食べました。

6月8日、心配された雨もそれ程でもなく、参加者8名は渡部氏の運転で目的地、気仙沼大島に向け予定通り9時に出発しました。私は地震発生時、仕事の関係で塩釜港のフェリー乗り場にある建物の中で働いていて、3階から津波の破壊力のすごさを見ていたし、その後一度だけ石巻と気仙沼の被災状況を見ていたので、その後どうなっているか知りたくて参加しました。中でも当時孤島となつてしまった大島は、私が仙台に赴任してきた翌年の1981年

最後に訪れたリアス・アーク美術館の印象は強烈でした。よくぞこれだけ撮り集めたと思う写真と多くの遺留品が整然と展示され、悲しみを増長させました。海と土に生きて



リアス・アーク美術館での震災資料展示

きた人々にとつて祖先代々の土地で生きることの思いは、第三次産業で生活をたてた私はその大切さが分からないのだと思えました。祖先から伝え継がれたコミュニティが一瞬に失われ大切な人々がなくなり、悲しい記憶だけが心に残り、一生消えないと思えました。しかし美術館の人たちはその悲しみを越えて記録として残り、後世の人々に伝えたい一心でこの仕事を完成された知り、胸が熱くなりました。色々な思いを胸に予定通り無事に戻ってきました。後日渡部氏が今回のため下見をされていたと伺い、本当にありがとうございます。



サテライト・オフィス
(仙台聖フランシス教会礼拝堂階下部分)

東日本大震災被災者支援プロジェクト「6月の報告」

〔新地町・広畑お茶会〕12日(水)に第82回として開催。地域から10名、仙台から9名が参加。(新地町・水曜喫茶)5日と12日に開催。参加者計16名。スタッフは毎回4名。5日には中部教区からの訪問者3名をお迎えしました。
〔お買い物支援〕毎週木曜日に継続しています。(被災地巡りツアー)6月8日に気仙沼方面へ。参加者8名。気仙沼方面の大島大橋、大島小田の浜、海の市シャークミュージアム、リアスアーク美術館を巡りました。(今後の課題)5月に終了した「原発のない世界を求める国際協議会」を受けて、今後東北教区内でもその資料、報告書の分かち合い

等が出来るようにと検討しています。

洗礼おめでとう

ミカエラ 赤坂 詩
(6月9日・盛岡)

永遠の平安

横山 貫 (6月1日・仙台)
司祭 テモテ 中山 眞
(6月8日・米国)

8月逝去者記念聖餐式

8月13日(火)午前10時

於 主教座聖堂

司式 吉田 雅人 主教
説教 加藤 博道 主教

伝道師 ルツ 星 安代

1955年8月5日逝去

主教サムエル今井正道

1983年8月12日逝去

司祭 John Cole McKim

1952年8月26日逝去

司祭 パウロ 関屋 正彦

1994年8月27日逝去

8月4日(日)は「日本聖公会青年活動のための日」です。宣教の器となる青年たちの学びと活動を覚えて祈り、献金をお献げください。